

かつての利用者力に

ここにいるよ

沖縄 子どもの貧困

第5部 先進地に学ぶ (5)

大津市「こどもSWセンター」

滋賀県大津市の「こどもSWセンター」

社会福祉士の若原幸代表らが、家庭や学校でさまざまな困難を抱える子どもたちを支える拠点として2016年4月、民家を改装し、開設した。

8月の連休には関係者総出で大掃除。ボランティアの若者たちも作業を主任った。かつて10代の居場所を支機を受けていた若者たちが現在、ボランティアスタッフとなり、活動を手掛けている。

「掃除終わった。寝も拭いたで」「そんなことまできれいにしてくれたんや。ありがと」

温かく見守る夜の居場所

「う、メッチャ助かるわ」。職員からの感謝の言葉を、若者が照れくさそうに笑う。「もう汗たくさん、1回帰って暑さきいてくるわ」

センターで運営する夜の居場所「トワイライトスライ」は生活困窮家庭の子どもたちを支える。週一四年後、9時、スタッフと一棟に食事や入浴、遊戯、学習などをしながら家庭的な交流も行う。安心できる居場所づくりのため、少人数の子にマンツーマンで対応している。

スタッフの社会福祉士、木村友美さんは「最初はしゃべってくれるまで無理せず待つ。最初はあっち行けって言っていた子がだんだん本音を話そうようになってきた」と戸惑いを晴らす。

「何となく、高校中退後も「何となく、」



「自分を見てくれてる大人がいるっていいけど、子どもには受け入れられなくていいわ」

かつてトワイライトスライ利用者は、現在、活動を主任っている若者の一人は「そこに事務所があるから来るだけス」と照れながらも「自分の弟や妹よりもかわいい」と話す。来所する子どもたちにとっては「お兄さん」的存在だ。

「何となく、高校中退後も「何となく、」

ゲームで遊ぶ若者たち。こどもSWセンターが居場所になってくれる。滋賀県大津市

運営はローネットに属する事業はトワイライトスライの事務所、老人ホームなどを活用するフリースペース3カ所。合わせて約15人の子どもを支援している。軌道に乗った時点で手放しなから、徐々に居場所を増やしていく考えだ。

若原さんは「子どもや若者の生活環境にあることが大事。何故になっても学校や就労などで困ったとき、気軽に立ち寄れる場所にしてほしい」と話す。「貧困」は政策による解決が必要だが、「困」は孤立を防ぐようにする地域の方で、ある程度支えていくことができない」と強調する。(2)子どもの貧困取材班・田嶋正徳

「何となく、高校中退後も「何となく、」

「何となく、高校中退後も「何となく、」